

「思い出」

(H10・40周年記念会報)

横山春樹 (中55期)

近畿双松会の創立総会は、昭和33年10月25日に堂ビルの清交社に於て盛大に開催されました。席上、四方田保氏(20期)を名誉会長に、永岡孝二氏(42期)を会長に推戴して、今日迄の40年の歴史のスタートを切ったわけであります。

私は飯塚隆久さんからお誘いを頂いて幸運にも此の場に出席することが出来ましたが、今では当日を知る残り少ない数の一人になっているのではないかと思います。

昭和の初期に四方田先輩の主唱に依って出来た近畿の松中卒業生会が、第二次世界大戦の前後を通じての不安定な世情の為、長い間途絶えていたものを、漸く落ち着きを取り戻した昭和30年代になって、同じ四方田さんの呼びかけに依って当時近畿日本鉄道の専務をしておられた永岡さんを中心に、米村又男(34期)・大森吉盛(39期)・坂本幸三(42期)・津田晴一郎(45期)・井上澄(46期)・後藤寛一(47期)・飯塚隆久(49期)・松本周二郎(49期)・古木政二郎(51期)等の諸氏が相図り、創立の運びとなったことを飯塚さんからお聞きしました。

翻走されたこれらの方々はいずれもその後の会の運営に熱心に盡されたのでありますが、今や一人としてそのお姿は無く、改めて40年の歳月の流れを感ずるのであります。

発会の当日、私は若い部類でありまして末席に連なっておりましたが、卒業以来20数年ぶりで聲を張り上げて赤山健児の歌を歌ったときは、言いしれぬ郷愁を覚えると共に、何か明るい力が体内に漲ってきたことを記憶しております。

それから約1年を過ぎた頃、仕事のご都合で退かれることになった古木さんに替って、私に常任幹事として事務局を担当するようにと会長から強つての要請があり、お引受けすることに致しました。爾来私は、永岡会長のご退任の前

年迄18年もの長い間お手伝いをする事になったわけであります。

永岡さんはその後近鉄の副社長になられ、益々ご多忙にご活躍をされたのでありますが、私達に接する会長は常に温顔を絶やすことなく、幹事会でも種々な意見をにこにこ取纏めておられました。会長職はどんどん交替した方が会に新鮮味が出て良いのではないかとの持論をよく口にされましたが、誰も承知するものはなく、長期に亘って留任、又留任を繰返されたのであります。

私が事務局担当の間、先輩の諸兄から温いご指導ご鞭撻を頂いたことは勿論ですが、総会の設営にあたっては、和田亮介(高1期)・竹内一郎(同)・樋野利明(同)・小山祐二(高2期)等の諸氏に大変ご協力を頂いたことを深く感謝している次第です。

総会は時に舞台を変えたこともありましたが、京都・神戸からのご参加をも考慮して曾根崎の多幸梅で行われることが多かったように思います。毎回90人前後の集りで、素朴な中にもとても和やかな会合でありました。参加者は当初は旧制中学の関係のみでありましたが、年月の経過と共に逐次新制高校からも参加されるようになり、後年の松江北高の同窓会との合体の方向へと進んで行ったように思います。

永岡さんは私が事務局担当のバトンを内田礼治郎さんにお渡しした1年後の昭和53年に、丁度母校の百周年祭を機会に山根誠氏(46期)に会長を譲られました。そして、昭和59年の総会に於て山根さんがご勇退の為、不肖私が会長をつとめることになりましたが、既に病床にあった永岡さんのお姿はその席上には見ることは出来ませんでした。お見舞を兼ねてご自宅にご報告に参った時、お励ましの言葉を頂いたのがお別れでありました。その翌年惜しくも永眠されたのであります。

20年の長きに亘って明晰な頭脳と慈愛に満ちた人柄によって、本会を興しその発展の為に一方ならぬご盡力を頂いたことは、正に明記すべきことと思ひます。

その後、会長は昭和63年に児玉治利氏(61期)に、次いで和田亮介現会長へと受け継がれ、夫々

良きリーダーシップの下に現在の盛況を見るに至っているのです。その間、事務局を担当された内田礼治郎（49期）・石倉重男（66期）・小山祐二（高2期）・安達現局長の並々ならぬご苦心に対し深く敬意を表する次第であります。

最後に私が一度、又とない機会に出会ったことをご報告しておきたいと思います。それは曾て校長として松江中学の歴史に大きな足跡を残されたと伝え聞く西村房太郎先生に図らずもお会いする機会を得たことであります。

先生は昭和43年に94才でお亡くなりになったのですが、その1年余り前に先生が枚方市にお住いのご長男のお宅にご逗留との由をお聞きになった永岡さんが、米村さん（34期）と共に訪問されることになり、私にも同行するようにご指示がありました。

既に90才を超えておられた先生は、矍鑠^{かくしやく}としてご機嫌良く私達をお迎え下さいました。直接の教え子である米村さん、永岡さんとの間に静かな談笑が続きました。赤山の思い出、松江の話など楽しそうなひとときでありました。対話の間に凛々としたご風格を感じつつも、それは長い長い歳月の移りを越えた何かほのほのとした温い師弟の心の通いを感じたことを記憶しております。

さて、西村先生については母校百年史に詳述してありますが、今や直接ご指導を受けられた方は殆ど稀であり、伝え聞く機会もない現在、少しご紹介をしておく必要があるのではないかと思います。私の手許に先生の著書「回顧録」があります。これは先生のご遺稿を昭和45年に双松会から再版として発行されたものですが、この中に当時の双松会会長、田部長右衛門氏が序文として先生のことを書いておられますので誌面の都合上、勝手に抜萃をしてご紹介させて頂くことに致します。

（前略）

赤山における教育は、もとより歴代の諸先生のご経営によって漸次培はれて参ったことではありますが、率乎として動かすべからざる精神的基柱を打ち樹てられたのは、実に西村房太郎先

生であります。

先生は明治7年長崎県諫早でお生まれになり、明治33年東京帝国大学文科大学史学科をご卒業と同時に島根県第一中学校にご赴任、以来昭和16年に東京府立第一中学校長をご退官になるまでの42年に亘る教育者としての第一歩をわが松江で踏み出されたのであります。明治40年3月に松江中学校長となられ、大正9年3月千葉中学校にご転任なさる迄、満20年間わが松中の子弟は先生の高風に接し薫陶に浴することが出来たのであります。

（中略）

先生はご在任中、上司に説いて大規模な県外修学旅行を実施して将来世界に雄飛せんとする生徒の視野を広め、小規模寄宿舎を数寮設置して、生徒をして自律の生活態度を養わしめられる等、特色のあるご経営を行われたのであります。就中、忘れ得ないのは、かの"二本松"を校風の象徴として石段を設けて卓立せしめ、"赤山健児の歌"を作詞して不滅の愛唱歌たらしめ、"質実剛健"の語をもって教育の信条、生徒自戒の目標とせられたことであります。

（中略）

先生ご在任の20年間に松江中学は揺ぎない校風が確立し、ここに学ぶ者も学ばざる者もその子の親も為政者も、挙って松江中学校を天下第一等の中学と誇って憚りませんでした。

先生が名門千葉中学、続いて東京府立一中へと移られても先生を慕うことは、ご在任中と少しも変ることがありませんでした。私は今更の如く教育の力の大きいことに感嘆し、一人の力がかくも偉大であり得ることを先生によって知らされる思いが致します。

（後略）

今や赤山台上に往年の双松の雄姿はありません。併し老樹を護るが如く若木は勢い良く成育を続けていると聞いております。時は移り人は変るとも、いつの世にも赤山に集う若人達が、心身共に健やかに成長されることを私は心から祈って止みません。